

● 人生晩夏に入る（知事の引退、友のがん告知など） 九四年三月～九七年四月

老いるとはかくも切なく哀しきか ファミリーレストランで一人飯（いい）食（は）む

新しきマンション一目気に入るも 己が余命を思いて迷う（港北ニュータウンにて）

ようやくに寝息立てたる妻の顔 観音のごとくわれには見ゆる

人生の重き荷物を背負い来て 一回り小さく妻は寝めり

十六年苦楽を共にせし知事は いま密やかに引退を決す（九四年十月）

引退を決せし知事は目を閉じて 一息ふかく長く呼吸す

知事室を辞しつつ想う初登庁の 遠きどよめき夢のごとくに

（一九年前の七五年四月、長洲さん五四、われ四四歳だった）

自治体の先陣切って走り来し 長洲県政にわれも悔いなし

（情報公開、環境アセス、民際外交、頭脳センター構想、KSP建設 etc）

県庁の古き庁舎を振り返り 振り返りつつ別れをつげる

さまざまの不幸はあれど嘆くまじ 息災にて迎う珊瑚婚われら

父母（ちちはは）がわれら二人を守りしか 風邪傷程度で三十五年過ぐ

息災の身なれば子らを導かん わが父母のこころ生かして

父母にすぎりて不幸払わんと もがき喘げど応えたまわず

六十路（むそじ）過ぎ恋しさ募る父母は いまもわれらを見守りてあるか

還らざる 青春（はる）を恋いつつ 花吹雪

花吹雪 わが死に場所は いずこなる

夜桜を 妻と眺めて 花冷える

花吹雪 見つめる先に 義母（はは）の顔

花冷えの 夜桜悲し 義母の顔

花吹雪 浴びつつ哀し 六十路越え

癌告げる 友は寒夜に 凜として（親友の安東仁兵衛*さんから肺がんの知らせ）

*旧制水戸高、東大法退学処分、『現代の理論』主宰、革新運動の戦略家

七時間の 手術に耐えし友 富士白し

富士寒く 病室の友 儒者のごと

春宵や 抗がん剤拒むと 友の T'ai

春宵や 昆明にまでいく 癌の友（同じころ、県庁の君は最後漢方に頼る）

電話して さて慰めの 言葉冷え

癌の友 いつもの声で 花霞

誤診疑う 友に構わず 花吹雪

春宵や 初孫の声 初電話